

## 古典の未来

李 愛 淑

今年の二月、『四〇〇年の伝統名画とともに読む―다케토리 이야기 (竹取物語)』(李愛淑翻訳・小嶋菜温子監修、韓国(国立)放送大学出版文化院、二〇二三年)がソウルで出版された。この韓国語訳『竹取物語』の出版について、まずは裏話から始めてみたい。

### 「絵巻とともに読む日本の古典」

今回の翻訳出版は、日本古典への情報や関心を持たない読者に焦点を合わせて企画された。最初から韓国の読者が「昔」の「異国」の物語を読み、共感し楽しめる古典翻訳という方針は確固たるものであった。

その有効な方法として、物語と絵画の力を融合し読者の可読性(読みやすさ)を高めていくとした。物語と絵画というジャンルのみでなく、一〇世紀の日本語と一七世紀の絵巻の融合でもあった。「融合翻訳」というタームを掲げ、韓国では無名の日本の古典を、二一世紀を生きる読者に読んでもらい、大衆性を確保する古典翻訳を闡明した。

そこで参考にしたのが、日本の物語絵画化の歴史である。たとえば、『源氏物語』は一二世紀初頭の絵巻(国宝『源氏物語絵巻』)を筆頭に以後多様な絵画様式を媒介に、貴族から庶民へと一般化していった。『竹取物語』も一六世紀以後、絵巻や絵入り本など、多様な絵画形式をもつ

て、大衆的な需要と享受を加速化したのである。絵の力が読者の可読性を高め、大衆性を確保し、更なる拡大を可能とした。

それで、漫画やアニメなどになっている現代の読者を見込んで、視覚性をもって、より読みやすく、分かりやすい古典翻訳を試みた。装丁にまで気を配り、最近韓国で注目を浴びている、大人向けの絵本、古典絵本の形を導入した。

いうまでもなく、日本古典の認知度を高めることで、現場で活性化されるはずの古典教育や研究のことも視野にいれた企画であった。

だからこそ、企画出版の核心は、『竹取物語』を導く「絵巻とともに読む日本の古典」というタイトルにある。日本古典の大衆化を目指して、古典翻訳への思いや意気込みのすべてを注ぎ込んだタイトルであった。

#### 「四〇〇年の伝統名画とともに読む」

ところが、その肝心なタイトルが、印刷直前「四〇〇年の伝統名画とともに読む」に変更され、刊行されることになった。物語と絵巻の融合翻訳、古典絵本の完成度を高めるために、至難な編集過程を最後まで共に全うしたのに。鮮やかに刻まれてある、「四〇〇年の伝統名画とともに読む」という文字を見るたび、いまだに心が痛む。

出版社は古典の翻訳出版を好まない。作品の名前さえ覚えのない日本の古典ともなればなおさらのことである。それは本を購入する読者を確保できるかどうか、確信が持てないからである。にもかかわらず、今回刊行を決めたのは、融合翻訳、古典絵本という企画の斬新さを出版専門家協議（出版を決める内部組織）で高く評価されたからであった。なのに、何故だろう。

やはり、マーケティング戦略からの苦心の提案であった。編集者は日本古典の認知度の低さに、絵巻という生々しい用語まで加わると、読者の目から、手から遠ざかってしまうという。やはり、読者の確保を憂慮してのことであった。日本の古典にとっても、不名誉きわまりないことだろう。

そこで、企画出版までの古典翻訳への思いをしみじみと回顧することになった。

### 古典の翻訳

情報が氾濫する現代社会を目まぐるしく生きる我々にとって、古典を読むことの意味はなんだろう。しかも、言葉も文化も難解な外国の古典を。ソウルの大手書店の店頭を飾る日本現代小説の韓国語訳を眺めるたびに、考え込んでしまう。古典受容の未来が不透明で苦戦する、古典研究者の羨望であろう。だからこそ、心の一隅では日本の古典翻訳が書店の店頭を飾る日を想像したりもしたのだろう。

と同時に、『源氏物語』の翻訳をと思いながらも、のびのびに遅延させていることに気づいては、啞然とする。いつも「是非、先生に翻訳してほしい」という編集者の甘い言葉に煽てられてのことではあるが、林芙美子や大江健三郎の作品など、翻訳の実績はかなりある。

もしかして私は、翻訳という作業が嫌いなのだろうか。いやそうでもない。言葉を媒介に、作者や物語に近づき、遠ざかり、自分なりの距離をとることは実に楽しい。苦辛の末の充実感。はなまはらかなものではない。実際、論文を書くたびに、『源氏物語』翻訳の蓄積も増えている。そういえば、大学時代、『源氏物語』韓国語訳を読み、先へと進まなかった痛烈な記憶がある。物語を楽しむどころか、ストーリーも掴めず、難攻不落の要塞に挑み、挫折してしまった。

確かに、せっかくの翻訳が読者を挫折させ、忌避されることへの恐怖がある。だから、店頭の現代小説をいつも羨ましげに眺めているのみであったのかもしれない。

それが、数年前、古典を翻訳することの意味と真摯に向き合う機会を得た。

### 古典の大衆化

二〇一六年五月、荒木浩教授の共同研究会での発表である（李愛淑「古典の翻訳——大衆性と視覚性を問う」（荒木浩編『古典の未来学』、文学通信、二〇二〇年一〇月）。その発表を期に、翻訳遅延の真の原因が自己中心的認識の甘さ、安易さにあることに気づいた。苦しくも省察しながら、古典翻訳の意味を真剣に問うていった。

世界文学は翻訳文学ともいわれている。文学は読者が読むことで意味を持つからであろう。古典の翻訳も読者が読み、共感することで意味を持つ。すると、翻訳は読者を中心に据えて、読みやすく、分かりやすい方向へと進まなければならない。

かつての一読者を挫折させたのは、日本の古典に精髓した翻訳者中心の翻訳だからであった。脚光を浴びる現代小説でなく、無名の古典小説を翻訳することの意味はここにある。読者中心の翻訳を通して、一人でも多くの人に読んでもらい、共感を拡大させていくことで、古典の大衆化へと繋がっていく。

読者を中心に置くことで、なによりも可読性を最優先する翻訳の方法を模索した。表紙や文字のレイアウトなどの視覚的効果までも視野にいれて、古典翻訳の大衆化の可能性を問い続けた。最終的には物語と絵画の「融合翻訳」を考案し、その実践として「絵巻とともに読む日本の古典」の出版企画へと進んでいった。



図1 교보문고 (Kyobo Book) の店頭  
2023年2月17日撮影



図2 立教大学図書館資料展示『竹取物語絵巻』  
2023年5月19日 図書館の許可を得て、撮影

## 古典の未来へ

難色を示しがちな出版社も、古典翻訳の意味や具体的な翻訳方法を盛る企画を受け入れ、異例なほどに支援してくれた。タイトルの変更も、前例のない物語と絵巻を融合した古典翻訳にかける出版社の期待でもあった。

その融合翻訳の効果について、監修者の小嶋菜温子先生からは「日本古典の精巧な表現性に疎い韓国の読者であっても、スムーズに物語に没入することが可能になり、ひいてはより深く玩味することのできる形となっている」（新刊紹介『立正大学文学部論叢』第一四六号）との評価をいただいた。

だからこそ、『다케토리 이야기』がソウルの最大手書店、교보문고 (Kyobo Book) の店頭を堂々と飾ることになったのである。読者にこそ古典の未来があることを噛み締めながら、読みやすく、分かりやすい翻訳、「絵巻とともに読む日本の古典」の冠をつけたシリーズ出版へ思いを走らせている。

ちなみに、古典の未来へ向かう今回の企画出版は、立教大学図書館の協力を得ることで、『四〇〇年の伝統名画とともに読む다케토리 이야기 (竹取物語)』として結晶された。また、『다케토리 이야기』の出版が、立教大学図書館の『竹取物語絵巻』展示企画（二〇二三年四月一日〜五月三十一日）の動機になったとの話を関係者からいただいた。光栄にもショーケースの中で貴重な絵巻が、『다케토리 이야기』の場面に合わせられ、広がっていた。

（韓国国立放送大学教授／国際日本文化研究センター外国人研究員）